

脱ネオニコ地図

生産者 #1

稲作

ネオニコを使わない技術は既に確立されてきているので、その普及が課題。有機に限らず慣行により近い栽培方法であっても、ネオニコ不使用は可能であることを、有機陣営から積極的に発信していき、不使用を宣言することができる。

野菜

天敵利用や IPM など、現場における技術交流によってネオニコ不使用技術を確立していく。

果樹

ひじょうに難しいが、対象の害虫ごとに「この虫にはどのような対策が可能か」というレベルでの技術交流を進めていく。

これらすべてを推進するためには、生協など流通団体の役割が重要である。流通団体が脱ネオニコに向かう姿勢を明確に打ち出し、生産者と消費者の間をコーディネートすることが必要（生産者単独では動けない）。「生産者の身を守る」という視点から、農薬のリスクを生産者に発信し、代替技術の確立をバックアップしていく。根本的には有機農業の普及こそが脱ネオニコの鍵となろう。

3年後の具体的な目標値は作れないが、左記のプロセスで順次、生産者と流通団体が脱ネオニコを宣言していき、消費者の側からも、「ネオニコ使用生産物は買わない＝有機農業を応援する」という宣言をしてもらおう。消費者の巻き込みには、大学の研究会などによる啓蒙も有効であろうし、それと並行して、政府への圧力も必要である。

文責・テーブル座長： 戒谷徹也
((株)大地を守る会商品本部農産戦略担当)